様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：４２６３０
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７３０７２７

研究課題名（和文）戦前期日本の幼稚園における音楽活動の展開に関する総合的研究

研究課題名（英文）Comprehensive research into musical activities at kindergartens in prewar Japan

研究代表者
長井　覚子（大沼覚子）（Nagai, Satoko）

白梅学園短期大学・保育科・講師

研究者番号：６０６０９９２３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦前期日本の幼稚園における音楽活動を理念・教材・教育方法・カリキュラム・実践の側面から総合的に検討することを通して、その成果と課題を明らかにすることを目的とした。具体的には、(1)松本幼稚園（長野）、及び愛珠幼稚園（大阪）における音楽活動の実態、(2)保育者による音楽活動研究、(3)小学校音楽教育関係者による幼児期の音楽活動への関与の実態、(4) 幼児向け唱歌教材、及び保育における器楽活動の変遷について明らかにした。これら成果は、保育者や音楽教育研究者が、乳幼児の音楽活動についての、自らの歴史的な立ち位置を確認し、批判的に省察する際の一助になると考える。

研究成果の概要（英文）：This study aims to comprehensively clarify the benefits of and challenges faced by musical instruction in kindergartens in prewar Japan from the perspectives of its ideology, teaching materials, education methods, curricula and practice. Specifically, this research clarified (1) the actual musical activities conducted at Matsumoto Kindergarten (Nagano) and Aishu Kindergarten (Osaka), (2) music activity research by nursery staff, (3) the participation of primary school music educators in children's musical activities and (4) changes in singing materials and instructional activities used by children. The results should help nursery staff and music education researchers in musical activities for children to better understand their position from a historical perspective and critically reflect upon their own roles.

研究分野：音楽教育学

キーワード：戦前期　幼稚園　音楽活動　音楽教育史　保育史

１．研究開始当初の背景

現在、幼稚園における音楽的な活動の意義は、主に領域「表現」の視点から論じられている。領域「表現」登場の背景には昭和 39 年制定の『幼稚園教育要領』における 6 領域（「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」）の扱いに対する反省があった。当時は、その内容や方法をめぐって多くの議論がなされたと同時に多くの戸惑いの声もあった。しかし登場から 20 年以上を経た現在では、「〈表現〉そのものへの理解を深め、子どもたちが日々の保育の中で表現を育む姿を的確に把握しようとする研究や、音楽的な視点から表現の育ちを支える具体的な道を模索する研究へ、つまり問題の焦点化と具体化」[1] が進んできているという。

以上の通り、幼稚園における音楽活動の扱いについては大きなパラダイム転換が図られたのだが、実際には特定の音楽技能の獲得を目的とした実践を行っている現場も少なくなく、領域「表現」の理念が広く共有されているとは言い難い状況である。もちろんそれらの実践をすべて否定するわけではないが、幼児期に、特に幼稚園や保育所という現場で、多くの子どもたちに必要と考えられる経験・活動、それらの目的と方法についてはいまだに混乱が見られるのが現状である。

その原因の一つには、戦前・戦中から現在の領域「表現」に至るまでの歴史的経緯、すなわち幼稚園における音楽活動の史的展開が詳細に検討されず、その成果と課題が不明確なままであったことがあげられるだろう。わが国における幼稚園制度は、明治初期に欧米から導入されたものであるが、その成立過程の研究をおこなった湯川は、「1899（申請者注：明治 32）年の『幼稚園保育及設備規定』で定められた幼稚園の基本的枠組みは、そのまま戦後に受け継がれ、現在の幼稚園の在り方をも大枠で規定している」[2] と述べており、現在の保育実践を論じる上で戦前の保育実践の解明は必要不可欠なことと考えられる。これはそのまま、音楽的な活動についても当てはまることだろう。同時に、戦前期にも現在の領域「表現」の理念につながるよう注目すべき思想や実践が見られ、そこから多くの示唆を得られると考えられる。

ここで幼稚園における音楽活動の史的展開に関する先行研究に目を向けると、時期については明治期、対象については実践で用いられたと考えられる唱歌・遊戯教材に多くの関心が寄せられてきた。しかしながら、幼稚園における音楽活動は、保育、あるいは音楽教育、どちらか一方の視点によって規定されているわけではない。そこには様々な人、モノ、思想のかかわり、理論と実践の往復運動の関係性のなかで展開されてきた。また、大正から昭和初期は、明治の幼稚園草創期を経て、わが国独自の保育を追究するために様々な方法が試みられた時代であり、その中には、現在の保育実践にもつながる成果や課題が含まれている。これらの視点を含んだ研究は急務であろう。

注：

1）今川恭子（2009）「―10 年間の研究動向―乳幼児と音楽教育」『音楽教育学の未来―日本音楽教育学会設立 40 周年記念論文集―』音楽之友社、123 頁。

2）湯川嘉津美（2001）『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、379 頁。

２．研究の目的

幼稚園における音楽活動は、保育、あるいは音楽教育、どちらか一方の視点によって規定されているわけではない。そこには様々な人、モノ、思想のかかわり、理論と実践の往復運動の関係性のなかで展開されてきた。その中で、保育の場における音楽活動の内容と役割はどのように変遷してきたのか。戦前期の幼稚園における音楽活動の史的展開を以上の視点から総合的に検討することを通して、幼児期の教育に対する成果と課題を明らかにすることが、本研究の目的である。

３．研究の方法

先行研究の批判的検討にもとづき、以下 2 つの視点と方法から音楽活動にかかわる理念・教材・教育方法・カリキュラム・実践を検討した。

(1)幼稚園における音楽活動は、「保育」という幼児の生活全体と密接にかかわっており、保育内容における諸領域と相互に関連しながら、生活のあらゆる場面で行われるという特徴をもっている。したがって、教材や方法論それ自体の研究に加え、そうした教材や方法論が実際に現場ではどのように用いられていたのか、保育にたずさわる人々が幼稚園での幼児の生活の中で音楽活動をどのように捉え、それに取り組んでいたのかを詳細に検討する。

(2)幼稚園における音楽活動を構成する（内容的に成立させる）要素、すなわち、その内容・担い手（保育者・学校音楽教育関係者など）・背景は多様である。したがって、それぞれの要素について　分析し、それらの関連を検討する。

具体的には下記の 2 点を研究の柱とする。

(1)関東甲信越地域の事例として東京、及び長野県の幼稚園、関西地域の事例として「京阪神連合保育会」とその傘下にある幼稚園を対象とし、音楽活動実践の内容とその特質を

明らかにする。

(2)幼稚園における音楽活動の内容形成に影響を与えた背景を明らかにする。具体的には、小学校音楽（唱歌）教育、外国幼稚園情報などに着目する。

４．研究成果

(1)主に、松本幼稚園（長野）、愛珠幼稚園（大阪）における音楽活動の実態について調査した。

【松本幼稚園】
『明治 37 年度保育日誌』『明治 38 年度保育日誌』『明治 39 年度保育日誌』など幼稚園関係資料を調査し、保育の中で用いられた唱歌・遊戯教材を整理した。明治 37 日誌からは、子どもが元気に太鼓を打っていた、という記述があり、戦前期幼稚園における数少ない器楽活動の記録として興味深い。また、開智小学校関係資料の調査も行った。今後の課題として、小学校唱歌授業との接続・連携状況なども検討していくことが挙げられる。

【愛珠幼稚園】
明治 20～30 年代の保育日誌について、翻刻を行い、保育の中で用いられた唱歌・遊戯教材を整理した。その他、例えば、明治 34 年日誌にはピアノ修繕やオルガン新調など楽器に関する記述、明治 35 年日誌からは、来園した外国婦人にマーチを依頼、研究会において子どもの音楽的発達に関する講演があった、ことなどの記述が見られた。今後の課題としては、さらなるデータの蓄積と、園に残されている楽譜など他資料の詳細な検討、他幼稚園の同時代の保育内容との比較などがあげられる。

(2)保育者による音楽活動研究について検討した。

【倉橋惣三における唱歌・遊戯論】
大正から昭和初期における倉橋惣三（1882～1955）の唱歌及び遊戯に関する言説を検討し、その特質と歴史的意義を明らかにし、保育における音楽活動の思想史に位置づけた。

①倉橋の唱歌・遊戯論には常に彼の保育思想が通底している。倉橋にとって唱歌と遊戯の第一義は、子どもの歌いたい、踊りたい気持ちを満たすこと、すなわち自己充足であった。音楽教育史の視点から見れば、このことは、「幼児期の唱歌・遊戯」に対する独自の見解が、具体的な子どもの姿とのかかわりの中で、この時期にすでに提示されていたという点で注目に値する。

②「子どもの自発的表現」と、文化遺産や技術の継承、すなわち「文化としての音楽の教育」という二つの方向から、音楽活動をとらえる視点が整理された。

③「子どもの自発的表現」と「文化としての音楽の教育」のうち、保育において重要視されるのは、前者、子どもの生活にあらわれる自発的表現としての音楽活動であったが、前者から後者への発展性をもにらんだ論を展開させていた。しかし、これを実践段階に移すうえでは、いわゆる発声などの声楽的技能や一般的な音楽教育の目標にかかわる事柄について、これらをどの程度、どのように指導するのか、という問題もあった。

上記の問題は、倉橋の中で全面的な解決には至らなかったものの、今日の実践に対しても非常に示唆的な問題である。現在の領域「表現」のもとでは、倉橋が述べたような、生活や遊びの中にあらわれる表現や経験が、子どもの育ち全体にとっても、「音を介した表現」の育ちにとっても重要であることへの認識が深まってきている。他方、社会や文化の中で受け継がれてきた文化や技術に出会い、その中で、子どもたち自らが文化の継承者となり、文化の担い手となっていくことも、表現者としての育ちに必要なことである。倉橋が指摘した二点はこのことにつながっている。

(3)小学校音楽（唱歌）教育との関係（特に東京高等師範学校附属小学校訓導・小林つや江の思想・実践について）小学校音楽教育関係者が幼児期の音楽活動にどのように関与したのか、その実態を明らかにしようとしたことである。本研究では、主に教材レヴェルでの関与を検討した。

①大正末期に日本教育音楽協会を設立した、東京音楽学校出身の音楽家・学校音楽教育関係者は主に学校唱歌教育の改善や、音楽教育の社会化・社会の芸術化を目的として活動し、その活動の一環として、『新尋常小学唱歌』や『エホンシヤウカ』、『新尋常小学唱歌』と『エホンシヤウカ』に動きをつけた『子供の舞踊』を出版した。機関誌『教育音楽』では学校用教材解説に加えて、幼稚園用の教材解説も行い、同様の活動は、同じく学校音楽教育関係者を対象とした雑誌『学校音楽』にも見られた。このように、音楽家や学校音楽関係者が、生涯にわたる音楽教育の一段階として、幼児の生活、児童期と幼児期の音楽教育、音楽活動について、その接続や連続性に関心をもった。

②『教育音楽』では、14 巻１号（1936 年）より尋常小学校や青年学校の各学年向け

教材解説の連載が始まり、翌年には幼稚園向け教材解説連載が加わった（15 巻４号、1937 年）。執筆者は、当時、東京高等師範学校附属小学校で低学年と女子学級を指導していた小林つや江であった。小林は、保育における音楽活動に、小学校の準備教育のみではない、固有の意味があることを主張した。教材解説では、『幼稚園唱歌』や童謡、『エホンシヤウカ』などから教材をとりあげる他、尋常小学校低学年児童の詩に自らが作曲した唱歌を数多く紹介した。教材解説は、楽曲、歌詞の形式分析に始まり、導入→拍子やリズムの確認→唱歌の練習という指導法から構成されていた。

(4) 唱歌教材作成の変遷と昭和初期の実態（昭和初期については日本教育音楽協会編『エホンシヤウカ』を中心に）、戦前期保育における器楽活動の展開等について明らかにした。第唱歌や器楽活動の展開について、通史的に考察し、戦後への成果と課題を明らかにしたことである

【唱歌教材作成の変遷と昭和初期の実態】
①唱歌教材の変遷

我が国の保育草創期の「唱歌」「遊戯」のために作成されたのが、「保育唱歌」（宮内省式部寮雅楽課、明治 10 年～）である。しかし、保育唱歌は、雅楽調の音楽や古語を基調とした歌詞などが幼児の実態にそぐわないという批判もあり、新しい教材の作成が待たれた。

その後、主なものだけをあげても、我が国における初めての官製唱歌教科書『小学唱歌集』（音楽取調掛編、明治 14 年～）、我が国における初めての官製幼児向け唱歌集『幼稚園唱歌集』（音楽取調掛編、明治 20 年）、我が国における初めての伴奏付き幼児向け唱歌集『幼稚園唱歌』（A・L・ハウ撰、明治 25 年。同続編を明治 29 年に出版）、日本人の手による初めての伴奏付き幼児向け唱歌集『幼稚園唱歌』2）（東くめ・滝廉太郎・鈴木毅一・巌谷小波編、明治 34 年）などが刊行された。特に明治 30 年代以降は、新教育運動や芸術教育運動の気運とも相俟って、明治期初期に作られた唱歌の問題点を指摘しながら、子どもの発達段階や心情、生活に即した新しい作品を作ろうという気運が高まった。『大正幼年唱歌』（葛原しげる・小松耕輔・梁田貞編、大正 4～7 年）や童謡なども、こうした背景のもとに生み出された歌である。また、保育研究も盛んになったことで、保育者が積極的に教材研究や制作を行う動きもあった。京阪神連合保育会における研究成果にもとづいて作成された『創作唱歌と遊戯』（望月クニ・田中銀之助編、昭和 2 年）や、『新体幼稚園唱歌』（倉橋惣三編、昭和 13 年）、『新幼稚園唱歌』（日本幼稚園協会編、昭和 13 年）などもその一つである。

②『エホンシヤウカ』の特徴と歴史的意義

・東京音楽学校出身の音楽教師たちを中心とした日本教育音楽協会によって、昭和 6 年から 8 年にかけて刊行された。東京女子高等師範学校附属幼稚園の関係者が作成に協力し、「系統的保育案」（東京女子高等師範学校附属幼稚園編、昭和 10 年）にも多くの作品が採用され、実際の保育の中で扱われた記録も残っている。所収の作品のうち、《チューリップ》、《コヒノボリ》、《マメマキ》などは、今なお保育における歌唱活動の主要教材である。
・「ハルノマキ」から「フユノマキ」の 4 冊に分かれており、行事や季節など子どもの生活と興味によりそうような題材が選ばれた。当初から作成委員には幼稚園関係者が選ばれ、幼稚園における遊戯の実際も参観するなど、子どもの実態に即した教材を作ろうとする姿勢がうかがわれた。音域など音楽的な側面にもそれまでの唱歌作成や教授の経験から、幼児に適切と思われる基準を設定した。音域や発声法に関しては、小学校以降の唱歌教育への発展性をにらみ、その技術的基礎を養おうとする意図も見られた。
・所収された楽曲はその多くが「系統的保育案」に採用され、附属幼稚園でも実践に供された。他方、実際の保育の中では、歌いやすいものもあれば、例えば遊戯などは、子どもの姿に合わせて工夫が必要なものもあったようだが、本稿で取り上げた例のように、日々の活動のなかで子どもの実態にあわせながら用いられていた。
・明治 20 年の音楽取調掛編『幼稚園唱歌集』以来、『幼稚園唱歌』や『大正幼年唱歌』など個人出版の唱歌集は数多く世に出た。しかし、文部省が編纂にかかわった幼児向け唱歌集は『幼稚園唱歌集』が唯一であった、という状況の中で、大規模な音楽教育研究団体である日本育音楽協会が幼児期の音楽活動に関心を示し、『エホンシヤウカ』の制作に乗り出したことは意義あることだったと思われる。
・音楽家や学校音楽関係者が、生涯にわたる音楽教育の一段階として、幼児の生活、児童期と幼児期の音楽教育、音楽活動について、その接続や連続性に関心をもち、そのことをふまえた教材を作ろうとしたことは、一つの試みとして評価できるであろう。一方で、こうした動向が、その後の歴史において、幼児への過度な技術指導、早期音楽教育を後押ししたものにはならなかったのか。

(5)本研究の意義

①本研究は、これまで明らかにされてこなかった戦前期幼稚園における音楽活動実践に関する歴史的事実を多層的・立体的に論じたでものあり、音楽教育史、幼児教育史、

現在の保育における領域「表現」の実践などの各分野に資する学際的な研究という意味でインパクトがあると思われる。

②保育者の研究活動や保育日誌の分析にもとづき、現場の実践に根差したかたちで研究を行う点に本研究の特色がある。また、戦前期幼稚園における音楽活動実践の実態を把握した研究、なかでも、本研究で対象のひとつとした関西地区の幼稚園は、我が国の保育の発展において大きな役割を果たしてきたにもかかわらず、音楽活動の史的展開においてはその歴史的意義が明確ではなかった。

③本研究は、音楽教育研究者・音楽の専門家が、幼稚園における音楽活動にどのようにかかわってきたのか、ということを潜在的なテーマとして含んでいる。しかし現時点では、音楽教育研究者・音楽の専門家にとって、乳幼児の音楽活動についての自らの歴史的な立ち位置を確認し、批判的に省察する材料は少ない。本研究課題の達成は、その作業の一部として不可欠のものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①長井　覚子、昭和初期の幼児向け唱歌集に関する一考察―日本教育音楽協会編『エホンシヤウカ』を中心に―、白梅学園大学・短期大学紀要、査読有、51 号、2015、19-36

②長井（大沼）　覚子、大正から昭和初期の倉橋惣三における唱歌・遊戯論、白梅学園大学・短期大学紀要、査読有、50 号、2014、1-16

③高見　仁志、長井（大沼）　覚子、杉江　淑子、寺田　貴雄、音楽教育学における「記録」、音楽教育学、査読無、43 巻 2 号、2013、29-36

〔学会発表〕（計２件）

①高見　仁志、長井（大沼）　覚子、杉江　淑子、寺田　貴雄、音楽教育学における「記録」、日本音楽教育学会第 44 回大会、2013 年 10 月 12 日、弘前大学

②大沼　覚子、二項対立的な分析視点をいかに超えるか？―昭和初期における「保育者」と「音楽（教育）の専門家」の言説分析を通して―、第 3 回音楽教育の研究方法を学ぶ会、2012 年 6 月 30 日、共立女子大学

６．研究組織
(1)研究代表者
長井　覚子（NAGAI, Satoko）
（大沼　覚子）（OHNUMA, Satoko）
白梅学園短期大学・保育科・講師
研究者番号：６０６０９９２３